

続・ 珈琲の思い出八

「あ、それじゃあ、飲み物を買に行きましょうか。」僕は立ち上がって優子を注文カウンターに誘った。

「はい、じゃあ、佑樹君のお父さん、お先にどうぞ。」

「それじゃあ、僕はええとカフェ・モカをトールで」

僕が店員にそう言うと、続けて優子が

「私は本日のコーヒーのキリマンジャロをショートで、あ、代金は別々でお願いします。」と店員に告げた。

「あちらの赤いランプの下でお待ち下さい」店員に言われて僕は、「僕が取ってきますから、優子さんは席で待っていて下さい。」と優子に言った。

二人分のドリンクを持って、席に戻ると、優子がニコニコしながら待っていた。

「ありがとうございます。えーと、あの、佑樹くんのお父さんのスーツ姿、初めて見ました。とつても素敵だなあ、と思つて……」

「え!?何をおっしゃいますか!僕のほうこそ優子さんの私服姿を初めてみました。とつてもかわいいなあ、と思つて……」

そう言うと、僕たちは恥ずかしくなつて、お互い真っ赤になつてうつむいてしまった。

なんなんだ、これは?これじゃまるで中学生の初デートじゃないか……。

そこで僕は何のために今日、優子に会いにきたのかを思い出した。

「そうだ、優子さん、今日の新聞見ましたよ!ほら、これ。」胸ポケットから新聞記事を取り出すと、優子は目をまん丸にして、さらに顔を真っ赤にさせた。

「ありがとうございます!わざわざ取っておいて下さったんですか!?(続)